

# 海外インターンシップ報告書

## 目次

1. はじめに
2. 1日目
3. 2日目（工場見学）
  - 3.1 ユウワベトナム工場
  - 3.2 FCVN, FMYV 工場
4. 3日目
- 4.1 ヒューテック大学訪問
5. 4日目
- 5.1 VSIP 事務所、ジェトロホーチミン
- 5.2 戦争証跡博物館
6. これからベトナムと日本
7. 最後に

## 1. はじめに

本報告書は、2025年9月8日から11日にかけて実施された、株式会社ユウワ様によるベトナムでのインターンシップに参加した際の活動内容、学び、そしてそこから得た考察についてまとめたものである。

## 2. 1日目

9月8日15時頃、ベトナム・タンソンニヤット国際空港に到着した。入国手続をき後、事前に手配していた車両にて宿泊先である BECAMEX ホテルへと移動した。空港からホテルまでは約 40km の距離であり、日本国内であれば高速道路を利用して 40~50 分程度で到着可能な範囲である。しかし、ベトナムでは高速道路の整備が不十分であることに加え、鉄道やバスなどの公共交通機関が都市部以外ではあまり発達していないため、移動には相応の時間を要した。実際、ホテル到着までは約 1 時間 30 分を要した。移動中、現地の交通事情に関するいくつかの印象的な点が見受けられた。特に交通マナーに関しては、日本とは大きく異なる様子が確認された。例えば、バイクの3人、4人乗り（図1）や過積載と思われる荷物の運搬、スマートフォンを操作しながらの運転、さらにはヘルメットを着用せずに走行する姿など、安全面への配慮が十分とは言い難い場面が頻繁に見られた。こうした危険運転が日常的に行われているためか、道路では常にクラクションが鳴り響いており、運転者間の意思疎通が音によって行われている印象を受けた。公共交通機関が未発達である一方で、配車サービス「GRUB（グラブ）」（図2）の普及が進んでいる点は注目に値する。GRUB は、旅客運送の免許を持たない一般の運転者が登録し、乗客を運ぶことができるサービスであり、都市部ではタクシーに代わる移動手段として広く利用されている。日本では少子高齢化の影響により、タクシーやバスの運転手不足が深刻化しているが、ベトナムのように GRUB のような柔軟なサービスが充実すれば、ドライバー不足の解消や高齢者の移動支援、さらには車両の効率的な運用による排出ガスの削減にもつながる可能性があると感じた。



図 1



図 2

ホテル到着後、1日目の夕食は BECAMEX ホテル近くにあるイタリアン レストラン「PIZZA 4P'S」(図3) にて、引率してくださった社員の方々とともにいただいた。同店は、もともと日本人がベトナムで創業したレストランであり、現在では日本にも進出し、東京にも店舗を構えているとのことである。提供されたピザは生地がもちもちしており、味も非常に良好であった。また、ベトナムの飲食店全体に共通して言えることとして、ノンアルコールドリンクの種類が非常に豊富である点が印象的であった。特にマンゴージュースなどのフルーツジュースは、素材本来の味がしっかりと感じられ、品質の高さに驚かされた。ベトナムでは新鮮なフルーツが豊富に流通しており、飲食文化の一端として大きな魅力を感じた。

図3：PIZZA 4P'S の外観



### 3. 2日目（工場見学）

#### 3.1 ユウワベトナム工場

インターンシップ2日目の午前中には、株式会社ユウワのベトナム現地法人である「ユウワベトナム工場」の見学を行った。同工場では、医療用カテーテルをはじめとする精密医療機器部品や、スマートフォン関連の微細部品など、極めて高い精度が求められる製品を、独自の金型加工技術を用いて製造している。工場内は清潔かつ整然としており、製品の性質に応じた環境管理が徹底されている点が印象的であった。まず、「徹底した生産管理」の面では、製品の特性に応じて生産エリアが細かく分けられていた。例えば、粉塵の混入を極端に嫌う医療用部品に関しては、材料の保管エリアと成形エリアが明確に分離されており、異物混入のリスクを最小限に抑える工夫がなされていた。また、光学機器部品や医療機器部品など、特に高い清浄度が求められる製品の製造に対応するため、工場内にはクリーンルームも設置されていた。このクリーンルームでは、成形から梱包までの工程が外部と遮断された環境で行われており、製品が外気に触れることなく出荷される体制が整えられていた。次に、「効率化」の取り組みとして、工場内の各機械には月間の目標稼働時間が掲示されていた。これは、作業員が不在の時間帯でも機械を可能な限り稼働させることで、生産効率を高める工夫である。実際に、夜間や休憩時間にも機械が稼働している様子が確認でき、限られた時間の中で最大限の成果を上げるための努力が随所に見られた。こうした取り組みは、単位時間あたりの生産量を向上させるだけでなく、納期の短縮やコスト削減にも寄与していると考えられる。さらに、「社内教育」の面でも、ユウワベトナムは非常に興味深い体制を築いていた。従業員のほとんどはベトナム人であり、日本人スタッフはわずか4名のみである。そのため、工場内では日本語、ベトナム語、英語の3言語が併用されており、特に英語表記が多く見られた。これは、ユウワベ

トナムがベトナム国内にとどまらず、タイ、インドネシア、アメリカなど、複数の国と取引を行っているためであり、国際的な業務対応力が求められていることを示している。従業員の多くは大学卒業後にユウワベトナムへ入社しており、中には日本での留学経験や企業勤務経験を経て入社した人材も存在する。そうした高い能力を持つ人材が、現地で技術を習得し、次世代へと継承していく姿勢は非常に印象的であった。日本人スタッフが少ない中でも、現地の人材が中心となって技術力を維持・向上させている点は、海外展開における人材育成の成功例として学ぶべき要素が多いと感じた。このように、ユウワベトナム工場では、生産管理・効率化・人材育成の各面において高度な取り組みがなされており、それが多様な製品の受注を可能にしている背景であると理解できた。今回の見学を通じて、単なる製造拠点としての機能だけでなく、現地に根ざした経営と国際的な視野を持つ企業運営の重要性を学ぶことができた。

### 3.2 FMYV 工場 (FUJIFILM YUWA 合弁会社)

ユウワベトナム工場で昼食をとった後、FUJIFILM と YUWA による合弁会社の工場を訪問した。この工場は、もともとユウワベトナムの第一工場として稼働していた施設であり、現在は YUWA が FUJIFILM に貸与する形で運営されている。工場の管理体制や生産環境は非常に整っており、ユウワの技術力と FUJIFILM の製品開発力が融合した現場であることが感じられた。FUJIFILM といえば、かつてはカメラメーカーとしてのイメージが強かったが、現在では医療機器、印刷技術、光学デバイスなど、幅広い分野で活躍するグローバル企業へと進化している。その背景には、急速なデジタル化によって写真フィルムの需要が激減した際、既存の精密塗布技術や製膜技術を他分野に応用することで新たな事業領域を開拓したという経緯がある。今回訪問した工場は、まさにその技術転用の成果が形となっている現場であり、FUJIFILM の柔軟な事業戦略と技術力の高さを実感する機会となつた。FMYV 工場で現在主に生産されている製品は 2 種類である。1 つ目は「FDC スライド」と呼ばれる医療用検査器具であり、最大 21 項目の検査が可能な多機能スライドである。この製品は水資源が乏しい地域でも使用可能な設計となっており、主に欧州、米国、日本などの先進国向けに販売されている。高精度かつ簡便な検査が可能であることから、医療現場でのニーズが高く、国際的な評価も得ている。2 つ目の製品は「Handy キット」と呼ばれる新型コロナウイルスの検査キットである。こちらは主にアフリカなどの発展途上地域において、WHO (世界保健機関) の活動の一環として使用されている。簡易で持ち運びやすく、現地の医療インフラが整っていない地域でも活用できる点が特徴である。今回の訪問で特に印象的だったのは、FUJIFILM の樋口氏による説明の中で語られた「社会貢献をビジネスとして成立させる」という考え方である。FDC スライドの販売によって得られた利益の一部を、Handy キットの生産に充てることで、収益性と社会的意義の両立を図っている。さらに、発展途上地域で使用された Handy キットが、やがて日本やアメリカなどの先進国的一般病院でも採用されるようになり、再び利益を生み出すという循環型のビジネスモデルが構築されている点に感銘を受けた。このような取り組みは、単なる CSR (企業の社会的責任) 活動にとどまらず、持続可能な事業として社会課題の解決に貢献している好例である。企業が利益を追求するだけでなく、社会的価値を創出することが可能であるということを、実際の現場を通じて学ぶことができた。今後、自身が社会に出て働く際にも、こうした視点を持ち、事業と社会貢献の両立を意識した活動を目指していきたい。

### 3.3 FCVN 工場（株式会社 FUJIKURA）

株式会社 FUJIKURA のベトナム工場の見学を通じて、同社がベトナム人材を効果的に活用しながら、高品質な製品づくりと人材育成を両立していることを実感した。特に印象的だったのは、各ロットに添付されている「資格能力表」の存在である。これは、担当従業員の名前と、会社独自の基準によるスキルレベルが記載されたもので、職種ごとに評価項目が異なり、各部門のリーダーが定期的に評価を行っている。この仕組みにより、従業員の技術力や成長度合いが可視化され、適材適所の配置や教育が可能となっている。ベトナム人材に対しても同様の評価制度が適用されており、現地スタッフの能力向上とモチベーション維持に寄与していると感じた。また、工場内のレイアウトにも特徴があり、各生産部門が壁で隔てられておらず、ワンフロアを共有している点が株ユウワとは異なっていた。これは、FUJIKURA が多品種少量生産を行っていることに起因している可能性があり、部門間の連携や柔軟な対応を重視していることがうかがえた。現場では、工程間の距離が近いため、情報共有や人の動きがスムーズで、効率的な生産体制が構築されていた。さらに、ヒューマンエラーの防止に向けた自動化の取り組みも進められていた。これはユウワベトナムでも見られた傾向であり、近年ベトナムの賃金が日本とさほど変わらない水準まで上昇していることも背景にある。人件費の高騰により、単純作業の自動化が経済的にも合理的となり、品質管理の面でも有効であると考えられる。今回の見学を通じて、FUJIKURA が人材の能力を正確に把握し、評価・育成を通じて生産性と品質を高めていること、また、レイアウトや自動化の工夫により、柔軟かつ効率的なものづくりを実現していることを学ぶことができた。特にベトナム人材の活用においては、単なる労働力としてではなく、育成対象としての視点が強く、国際的な人材戦略の一端を垣間見る貴重な機会となった。

## 4. 3日目

### 4.1 ヒューテック大学訪問

3日目午前中の HUTECH 大学での日本語を学ぶ学生との交流を通じて、ベトナム人の国民性や語学力、文化的価値観について多くの学びを得た。学生たちは非常に友好的で、発表会後には数名が自ら声をかけてくれ、日本語での会話を通じて友人関係を築くことができた。質疑応答の場面では、通訳がいるにもかかわらず、学生たちは積極的に日本語で質問・応答を行っており、日本人学生との違い（言語への挑戦意欲）を強く感じた。日本語を学ぶ姿勢の真剣さと、伝えようとする意志の強さに感銘を受けた。また、ベンタイン市場やサイゴン市場での交流を通じて、ベトナム人の親しみやすさや礼儀正しさを肌で感じた。初対面でも笑顔で接してくれる温かさが印象的で、遠慮がちな態度や相手を思いやる姿勢は、日本人の国民性と通じるものがあると感じた。特に女性は、仕事や学業に対して非常に真面目で、責任感が強い印象を受けた。さらに、日本でのインターンシップ経験を持つ学生に「最も苦労したことは何か」と尋ねたところ、「コミュニケーション」との回答があり、文化の違いを挙げた信州大学の交換留学生とは異なる視点が印象的だった。言語そのものよりも、伝え方や関係構築の難しさに課題を

感じていたことは、今後の異文化協働において重要な示唆となる。このような経験は、来年予定している留学生活に向けて、異文化理解と人間関係構築の面で非常に有益であった。語学力だけでなく、相手の文化や価値観を尊重しながら関係を築く姿勢の大切さを実感し、自身の国際的な視野を広げる貴重な機会となった。



交流の様子

## 5. 4日目

### 5.1 VSIP 事務所、ジェトロホーチミン

4日目には、はじめに VSIP (Vietnam Singapore Industrial Park) 事務所を訪問し、ベトナムの土地政策や産業誘致の実態について学ぶ貴重な機会を得た。VSIP はベトナム国内において約 12,000 ヘクタールもの土地を所有しており、その土地は国から購入したものである。ベトナムでは VSIP のような企業が広大な土地を所有している点が非常に印象的だった。この土地の多くは、もともとゴム農家が代々営んできた農地であり、工業団地への転用に対して一部の農家が反対しているという現状も紹介された。土地開発が地域社会に与える影響や、伝統的な生活との摩擦について考えさせられる内容であった。VSIP は、ベトナムが 4 つの地区に分かれて最低賃金が異なることを踏まえ、企業のニーズに応じて最適な立地を提案し、工場誘致を行っている。地理的条件や人材の特性、インフラ整備の状況などを総合的に判断し、企業にとって最も効率的な進出を支援している点が印象的だった。また、労働文化に関する話題では、ベトナム人男性の仕事に対する熱意がやや低い傾向があるとの指摘があり、VSIP 事務所やユウワベトナムの設計部門では女性従業員の割合が圧倒的に高いことが紹介された。ベトナムでは共働き世帯が一般的で、3 世帯以上が同居する大家族も多いため、育児に関して親戚の支援が得やすく、女性が育児休暇を長く取らずに職場復帰する傾向があるという。これは、日本とは異なる家族構成と社会的支援のあり方を反映しており、女性の労働参加率の高さにもつながっている。さらに、産業構造の変化についても興味深い話があった。2011 年当時は円高 (1 ドル = 70 円) の影響で、組み立て型の産業が多く進出していたが、現在は円安 (1 ドル = 150 円) の影響により、食品産業の工場進出が増加しているという。為替の変動が産業選択や進出形態に直接影響を与えることを実感し、経済環境と企業戦略の関係性について理解を深めることができた。今回の訪問を通じて、土地政策、労働文化、経済動向といった多角的な視点からベトナムの産業構造を学ぶことができ、非常に有益な経験となつた。

VSIP 事務所訪問後、ジェトロホーチミン事務所を訪れ、ベトナムの経済構造や今後の成長可能性について、より広い視点から学ぶ機会を得た。ジェトロホーチミンは、日本貿易振興機構のベトナム支社として、現地の経済状況を分析し、ベトナム進出を検討する企業へのアドバイスや、日系企業の相談対応を行っている。2000 年に JICA の支援により設立されたベトナムの公的機関であり、外国貿易大学に隣接している点も特徴的である。外国貿易大学は、ベトナム国内でも上位

5%の優秀な学生が集う名門校であり、経営者やトップマネージャーの育成を目的としたプログラムが展開されている。授業では日本式経営や日本企業の知見が中心となっており、日本との経済的・人的なつながりが深いことがうかがえる。こうした教育環境は、将来的な日越間のビジネス連携を担う人材の育成にもつながっている。事務所の方の話では、現在のベトナム経済の特徴として、ASEAN諸国の中でも経済危機下において安定的にGDP成長を維持してきた点が強調された。製造業を中心とした外資誘致の成功や、若年層の労働力の豊富さがその背景にある。一方で、近年は高齢化の兆しも見られ、現在の人口構造は40年前の日本と類似しているとの指摘もあった。これは、今後の社会保障制度や労働力確保に関する課題を予見させるものであり、持続可能な成長のためには人的資源の再設計が必要になる可能性がある。VSIP事務所で学んだ土地政策や産業誘致の実態とあわせて、ジエトロで得た経済的視点は、ベトナムという国を多面的に理解するうえで非常に有益だった。さらに、ベトナムの成長の背景には、制度設計と人材戦略の両面があることを実感し、より深い関心を持つようになった。

## 5.2 戦争証跡博物館

昼食後、ホーチミン市にある戦争証跡記念博物館を訪れた。これまで日本の戦争についてはある程度の知識があったが、ベトナム戦争については詳しく知らず、国外で起きた戦争の実態や影響を学ぶ貴重な機会となった。展示は非常に生々しく、戦争の悲惨さと人々の苦しみが強く伝わってきた。特に印象に残ったのは、「alone」という絵である。戦地で息子を亡くした母親が、静寂の中でぼんやりと息子の形見を見つめる姿が描かれており、言葉では表せないほどの喪失感と孤独が伝わってきた。絵の中の母親の表情は、涙も声もなく、ただ沈黙の中に佇んでいた。その姿を見て、戦争がもたらす無力感や、残された人々の心の痛みは計り知れないものだと実感した。また、枯葉剤の影響に関する展示も衝撃的だった。写真には、化学兵器の影響で生まれた異形児や、今もなお身体的・精神的な苦しみを抱えて生きる人々の姿が映し出されていた。戦争が終わった後も、その爪痕は世代を超えて残り続けていることを目の当たりにし、戦争の本質は「終わったら終わり」ではないという事実に深く心を打たれた。この博物館訪問を通じて、戦争の悲劇は国境を越えて人々の人生に深く影響を与えること、そしてその記憶を風化させてはならないという思いを強くした。日本で育った私にとって、国外の戦争について学ぶ機会は限られていたが、今回の体験は視野を広げる大きなきっかけとなった。今後、異文化理解や国際協働に取り組む上でも、歴史的背景や人々の記憶に寄り添う姿勢が重要であると改めて感じた。

## 6. これからのベトナムと日本

今回のインターンシップを通じて、ベトナムと日本の関係は「経済的なつながり」だけではなく、人と人との交流を通じてもっと深いレベルで結びついていく可能性があると感じた。工場見学では、ベトナム人の従業員が高い技術力と責任感を持って働いている姿が印象的だった。日本企業が現地で評価制度や教育体制を整え、ベトナム人材を育成していることは、持続可能な国際協働のあり方としてとても理にかなっていると感じた。VSIPやジエトロの訪問では、ベトナムが経済危機の中でも安定した成長を続けてきた背景に、若い労働力や柔軟な家族構成があること

を知り、特に、女性の労働参加率の高さや育児と仕事を両立できる環境は、日本が抱える少子高齢化や人手不足の課題に対して、学ぶべき点が多いと感じた。制度だけでなく、社会の価値観や生活スタイルそのものが、国の成長に大きく関わっていることを実感した。また、HUTECH 大学の学生との交流では、言語への挑戦意欲や礼儀正しさに触れ、教育を通じた文化理解の可能性を感じた。ベトナムでは日本式経営を学ぶプログラムが展開されており、次世代のリーダーが日越の橋渡し役となることが期待される。こうした人的交流は、両国の未来を形づくる基盤となるだろう。ベトナムはこれから高齢化という新たな課題に直面するが、日本が経験してきた社会の変化を参考にしながら、独自の成長モデルを築いていくことができるはずだ。日本にとっても、ベトナムとの関係は単なる海外展開ではなく、互いの課題を共有し、補い合う「共創」の関係へと進化していくべきだと思う。両国がそれぞれの強みを活かしながら、未来をともにつくっていく姿勢こそが、これから国際関係の理想だと感じた。

## 7. 最後に

今回の海外インターンシップにおきまして、株式会社ユウワ様をはじめ、現地でご案内・ご支援くださった社員の皆様、関係企業の皆様に心より感謝申し上げます。農学部生として参加した私にとって、ベトナムという異文化の中で多くの学びと気づきを得ることができました。工場見学や現地大学との交流など様々な活動を通じて、国際協働の可能性や文化理解の大切さを実感し、今後の学生生活や将来の進路に活かしていきたいと強く感じました。貴重な機会を本当にありがとうございました。